

+

2021 年

9 月第 3・4 週の主日礼拝説教要約

・ 9 月 19 日：マタイ福音書 18：10-14.

「 小 さ き 者 の 天 使 」

・ 9 月 26 日：ヨハネ福音書 9：1-9.

「 一 寸 先 の 光 」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

説教《小さき者の天使》

ある日、イエスの弟子たちがイエスのもとに来て質問をします。「天の国では誰がいちばん偉いのでしょうか?」。実に突拍子もない無邪気な質問です。主なる神が一番偉いことを理解し、ナザレのイエスにメシアの片鱗をみとめつつも、この師の地位が社会で認知されているわけではなく、弟子たちは身分の保障も何もないままに従っているのです。

ただ、ナザレのメシアが本領を發揮した晩には自分たちにも何らかの地位が与えられることを夢に見つつ、遠回しの質問をイエスにしてみました。

イエスはある時、弟子たちの愚かな質問にこう答えたことがありました。「いちばん上に立ちたい人は、全ての人の僕となりなさい、」と。こちらは異邦人との比較における、「この世」の振る舞いに関する教えでした。一方、「天の国(=神の国)」ではどうなのか。何らかの逆転現象は期待できるのでしょうか?

イエスは、弟子たちに対して、天の国のことを兎や角言う前に、そこに入ることを目指せと諭します。では、どうやって...? イエスは近くにいた小さな子供を呼び寄せて、弟子たちにこう語りかけます。「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることができない。」と。

この言葉は、ユダヤの社会で高い地位にあったニコデモに語った時の言葉とも、よく似ています。「誰でも水と霊とから、新たに生まれなければ、神の国に入ることはできない。」。

新たに生まれることは、必然的に「子供のようになる」ことに他なりません。そうです、天の国にはこの世の権力者に匹敵する存在はいません。神と人、唯一の神と、上下関係のない平等な人間たちだけが、そこに入国することが許されるのです。

すると、そこに入る以前の、世俗の世界との関係を強いられている、無垢の予備軍を、一体、誰が守ってくれるのでしょうか?

そもそも、天の国でも神の国でもない愛なき世界で素直に「子供のようにでいる」ことは可能なのでしょうか? ニコデモがそうしたように弟子たちも、師イエスに問い質すべき時ではないのでしょうか?

彼らはこの世におけるイエスの苦勞を一番よく知る立場にあります。

神キリストがそこにおられるのに、この世は何ら悔い改める気配もなく、不信仰が横行し、権力者やその手下は、メシアの命を奪うことしか頭にありません。そうです、メシアでさえも危険極まりないこの世界で「子供のようにいる」ことは自殺行為ではないのでしょうか？

イエスは、弟子たちが恐れていることが何なのかは、お見通しでした。その時イエスは弟子たちに、「子供のようになること」と、イエスの名のために「これらの小さき者を受け入れる」ことの両論を教えます。これは善きサマリア人のお話にあるごとく、「隣人に対する愛」と「隣人としての愛」、これが両立してこそ隣人愛は完成するのとよく似ています。

そう、人は神から一方的に何かを受け取るのではなく、創造主である神の意志をこの世に対して実現していく義務を負っているのです。ただ、神の子キリストでさえも手を焼く不信仰なこの世からキリスト・イエスが去ってしまったら、神と人の関係は完全に断絶してしまうのではないのでしょうか？ その時、地上に残された、「いと小さき子供のような存在」はどうなってしまうのでしょうか……？ その心配を払拭してくれるのは天使の存在です。旧新約聖書は神と人間以外の存在を、極力排除する精神に貫かれており、その影響からか、天使でもサタンでもない預言者の価値を殊更重んずるところがあります。これに比べたら天使の役目は至って限定的なものでしかありません。ただ、この天使がいてくれるおかげで見守られている「いと小さき者」の存在が、百匹の中から迷い出た一匹の羊に譬えられます。そうです、この羊と神との関係は、中を取り持つ天使の働きによってしっかりと守られることとなり、神の力が及ぶときに、羊は必ず捜し出され、保護され、無事、天の国(=神の国)へと招き入れられることが約束されているのです。

説教 《一寸先の光》

仏教用語の因果応報には二通りの意味があります。善い行いをすれば善い結果が得られる善因善果、さらに、悪い行いをすれば悪い結果となる悪因悪果、この二つを合わせて因果応報となります。

義人ヨブの人生の前半はまさに善因善果そのものでしたが、突然災いが降りかかるという不運に見舞われます。彼の妻は無垢のヨブが、神から試みられる姿を見て失望し、彼にこう囁きました。「あなたは神を呪

って死ぬべきだ(ヨブ2:9)。」と。すると、ヨブはこう答えます。「私達は神から幸いを受けるのだから、災いをも受けようではないか(ヨブ2:10)」。

預言者エゼキエルが語る神の言葉に彼の名前が出てきます。「たとえばその中にあの三人の人物、ノア、ダニエル、ヨブがいたとしても、彼らが、その義によって救えるのは自分の命だけである(エゼキエル書14:14)」。

バビロニア補囚時にユダヤ人の長老がエゼキエルに伺いを立てた時の、神の御心が告げられます。御心は、ユダヤ人が故郷を失ったその原因が、彼らの不信仰と偶像崇拜にあることを指摘しますが、当人たちには自らの過失に対する、何の反省もなければ悔い改めもなく、ただ時間だけが過ぎ去っている現実が示され、さしあたり彼らを救う手立てがないことが語られます。もし今、彼らの中に歴史上の三人の義人がいたとしても、救われるのは、その三人だけで、しかも一代かぎりであると。善因善果も悪因悪果も一代かぎり。神から愛されて子孫繁栄の未来が示されても、御心に反する人間が出現すれば、繁栄もそれまでであると。

しかし、ファリサイ人に限らず、イエスの弟子達たちも、たとえば生れつきの全盲という障害を負う人は、親か本人が大きな罪を犯したことによる因果応報(悪因悪果)であると誤解していたようです。

さて、ヨハネ福音書に登場する、その生れつき全盲の成人男性(ヨハ福音書9:21)は幸いにして両親が健在でした。これは、平均寿命が30歳に満たない当時としてはとてもめずらしいことで、彼はけっして天涯孤独の身の上ではなかったのです。過ぎ去った過去は取り戻すことはできません。ただ、両親を失う前に逞しく生きる術を身につけなければなりません。

イエスがある日、彼の前を通りかかった時に、そのチャンスがおとずれました。まず、弟子たちが、イエスに尋ねます、全盲は誰の罪の報いなのかと。するとイエスは答えます。「本人が罪を犯したからでも両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現われるためである。」。そう、原因は不明の過去にあるのではなく、希望の未来にあるのだと。イエスは、世の始めに、そこから人が造られた地面の土(創世記2:7)を捏ねて、この人の目の上にぬり、シロアムという貯水池に行って洗淨しなさいと命じます。給水地として利用していたのでしょう。彼には見えなくとも道順は知っていました。彼は、言われたとおりに、その道を辿り、そこで自分の目を洗います。彼の目は開かれました。そして、希望の未来はその時から始まったのでした。